北海道浦河町の「べてるの家」における「場所性」の問題

ーアイヌの歴史・文化とキリスト教文化の影響の視点から

東海学園大学　　早野　禎二

北海道浦河町にある精神障害者施設「べてるの家」は、「当事者研究」や「降りていく生き方」、「弱さの情報公開」というユニークな考え方によって運営され、その取り組みが注目されてきた。報告では、「べてるの家」は、なぜ、北海道の浦河町という「場所」で生まれ、それが「べてるの家」の特徴とどのように関連しているのかを明らかにしたい。

精神医療と「場所性」の問題については、精神医療史の分野で、橋本明氏が、『治療の場所と精神医療史』の中で、近代以前においては精神医療の「治療の場所」は、神社仏閣、滝場、温泉、宿屋などの自然・社会環境と医療・看護行為とが結びついた「そこにしかない場所」としてあったが、近代日本の精神医療は、その場を私宅監置室や病院・施設といった家族関係や地域社会から閉ざされ、切り離された均質な「空間」に変えていったとし、もう一度、精神医療と「治療の場所」を結びつける必要が今あるとしている。

報告者は、「べてるの家」は、「場所性」を持った「治療の場所」であると考えるが、それは伝統的な「治療の場所」ではなく、近代化の歴史を経て形成されてきた「治療の場所」である点に特徴があると考える。「べてるの家」の形成を考えるうえで、これまで論じられることが少なかったが、報告者が重要であると考えるのは、アイヌの人々との関係である。浦河町にもアイヌの人々の歴史があり、「和人」が明治以降、移住し、地域社会が形成されていくが、アイヌの人々は、地域の中でマイノリティとして差別を受け、仕事の不安定さもあってアルコール依存となり、家庭崩壊となっていく人々が少なからずいた。

「べてるの家」は、浦河教会に、地域のアルコール依存のアイヌの人々や精神障害者が、浦河赤十字病院のソーシャルワーカーでありクリスチャンであった向谷地氏や教会関係者の努力で集まるようになり、そこで、作られていった関係が、後の「べてるの家」の原型になったと報告者は考える。それは、浦河町の浦河教会という「場所」で生まれた精神医療の「治療の場所」である。

「べてるの家」には従って、アイヌの歴史や文化、キリスト教および教会の影響があると考えられる。「べてるの家」では、幻聴は治療して、取り除かれるべきものではなく、幻聴とうまくつきあいながら生きていくという方法がとられる。それは、アイヌの人たちに残っているシャーマニズム文化の影響があるのではないかと推測される。また、浦河教会という「聖なる場所」を始まりの「場所」として形成されていった共同的な関係や「和解」や「回復」「降りていく生き方」という考え方には、キリスト教思想の影響があると考えられる。

「べてるの家」を中井久夫氏の「治療文化論」の分析枠組みから見ると、キリスト教文化、アイヌの文化、ＳＳＴなどの科学的な精神医療文化などいくつかの「治療文化」が、多層的、あるいは併存的にあり、それらが相互に影響、融合しながら全体として「べてるの家」の「治療文化」を構成しているのではないかと報告者は考える。

以上の枠組みのもとに行ってきた現地調査で得られた知見を報告していきたい。

文献

橋本明編　『治療の場所と精神医療史』　日本評論社　2010 年

中井久夫　『治療文化論―精神医学的再構築の試み』岩波現代文庫　岩波書店　2001 年